

開講にあたって

上田女子短期大学が昭和四十五年から毎年地域に開放してきた講座の名称を公開講座と改称して以来、平成十一年で二十回を迎えることになりました。改称以前（母親大学、婦人大学）は、女性問題に主題をしぼってきた関係もあって受講生の多くは女性でしたが、最近では受講生の三分の一は男性が占めるようになりました。このような現状を考えて公開講座の内容も女性問題ばかりではなく、一般的な主題が主流を占めるようになってまいりました。

今回、上田女子短期大学公開講座の名で出版することになりました『語る』は、平成十年度に長野県教育委員会の委託を受けて開講した県民カルチャー「上田女子短期大学開放講座」の統一テーマを、そのまま書名にしたものであります。

統一テーマが「語る」と決まったとき、私はニーチェの『このようにツアラトウストラは語った』を思い出していました。その作品では、様々な事柄が比喩を使って語られており、私はその一言一言に強い共鳴を覚えるからであります。例えば教養人と呼ばれる人たちについては、次のようにニーチェは語っています。

「わたしの驚いたことは、五十の斑点で顔と手足を色どって、きみたちはそこに座っていたのだ、きみら現代人たちよ！」（吉沢伝三郎訳、理想社）

ニーチェがここで五十の斑点と表現しているものは、教養とか文化とか呼ばれる雑多な知識にたいする比喩であります。たんに雑多な知識だけを身につけてそれで教養人だと思いきんでいる現代人は、彼の言葉を借りればまさに「教養の俗物」であるというわけです。ニーチェは、真の教養というものは単に知識だけを身につけるだけではなく、そこから正しい判断が生まれ自分の行動に結びつくものでなければならぬと語っております。

このニーチェの教養にたいする考え方は、私たちの公開講座が目指しているところと同じであります。あれもこれもと講座内容を雑多に並べるのではなく、現代社会のなかで根本的に考えておきたいことを学問的な面から取り扱い、少しでも受講する皆様方の日常生活のお役にたつことを願ってこの講座を開講しております。

このような考えのもとに企画している公開講座に、毎年、多数の人々が参加して下さいますことに心から御礼申し上げます。またこの講座を開くにあたって、蔭で支えて下さった多くの関係者と、『生きる』『創る』に続いて『語る』の出版を許可して下さいました上田女子短期大学に感謝いたします。

公開講座委員長 松田幸子